

川に潜む危険理解を

幕別で男児 子供だけで遊ばせない 流され死亡



川に潜む危険や川との付き合い方を説明する関川会長

—水難事故が後を絶たない現状をどう受け止めているのか。

川は子供が自然を学ぶフィールドでもある。川辺では昆虫や動植物がたくさん見つかり、子供が興味を引き付けられる場所だ。それだけに、子供の犠牲が相次ぐことを残念に感じる。

近年の水難事故を振り返ると、川には「危険がつきもの」「危険と隣り合わせ」という側面への理解が不十分と受け止めざるを得ない。保護者ら大人の同伴なしに近付かせないことはもちろん、大人が付き添う場合でも、本来はライフジャケットやヘルメットの着用が必要だ。だが、安全対策が図られていない場合がほとんど。何より危険に対する認識が薄いと感じる。

—具体的にどんな危険があるのか。
川は岸から見ると深い場合が多い。岸から穏やかな流れに見えても、水面下

では石や岩の影響で流れが複雑になり、特に深みは流れが速い。川底の石は藻が付着して滑りやすく、転倒の危険もある。頭を川底の石に打ちつけて意識をなくし、顔が水に浸かった場合には水死する可能性も十分考えられる。人は水深10センチでも溺れることがある。

川辺は草が生い茂り、河岸が水面側にせり出した状態になっているところもある。川と岸の境界が見えなかったり、河岸が崩れて足を踏み外すケースもある。

今の季節は雪解けで水位が増し、6月ごろまでは水温も10度前後しかない。転落すると、子供なら腹まで浸かっただけでショック状態となり、普段の反応ができなくなる。大変危険だ。

—事故を防ぐためには。
完全な予防策はないと思

った方がいい。立ち入らせないために柵で囲うのも現実的ではない。家庭や地域が川に潜む危険について正しく理解し、身を守る対策を講じて付き合っていくことが肝心。とりわけ「子供だけで遊ばせない」「子供1人で立ち寄らせない」ところには細心の注意を払ってほしい。付近住民が日頃から、子供だけの川遊びを見つけたら声を掛けるだけでも事故抑止につながるはず。地域一丸で子供を見守ってほしい。

子供が犠牲になった近年の水難事故

2009年5月

幕別町内の十勝川で遊んでいた小・中学生4人が流され、うち小学4年の女子児童が死亡

2011年9月

帯広市内の札内川で、中学生5人が丸太に乗って遊んでいたところ、うち中学2年の男子生徒が流され死亡

2012年5月

幕別町内の途別川で、付近で遊んでいた男児(5)が流され死亡

幕別町内の途別川で13日、付近で1人で遊んでいた男児(5)が流され、幼い命を落とした水難事故。十勝管内では近年、子供の犠牲が相次いでいる。豊かな自然が広がる川辺は子供の身近な遊び場となる反面、さまざまな危険をはらみ、時に幼い命をのみ込む。悲惨な水難事故をなくすために。川辺で子供の情操教育などを展開する「帯広川伏古地区子ども水辺協議会」の関川三男会長に、川に潜む危険や川との付き合い方について聞いた。

(聞き手・杉原尚勝)

帯広川伏古地区 関川会長に聞く 子どもの水辺協